

会話フランス語のストラテジー — 談話への名詞句の導入をめぐる¹⁾

東 郷 雄 二

0. はじめに

本稿は、実際のフランス語会話の録音資料をもとに、話し言葉のフランス語の文法を明らかにすることを目的としている。本稿では、特に談話内への名詞句の導入の方略の問題を取り上げる。今回用いたコーパスは、Aix-en-Provence大学の学生が1985年に作成したものである。石工と客(女性50~55歳)の会話が40分にわたって録音されている。

1. 談話構築のモデル

1.1. 本稿では、談話 *discours* は話し手と聞き手との緊密な共同作業を通して作られるという観点に立つ。なかでも重要なのは、対話相手の知識状態のアセスメント(査定)である。話し手と聞き手は、互いの認知状態をアセスメントしながら談話を構築する。アセスメントで重要なのは、「何について話すか」である。この「話にのぼる何か」を談話の指示物 *discourse referent* (以後 DR と略す) と呼ぶ²⁾。DR はふつう名詞句の形で談話に導入される。しかし、すべての名詞句が DR であるわけではない³⁾。

DR の談話内での確立の方略を、メンタル・スペース理論に依拠して次のように考える。DR を登録する場として、「話し手スペース」と「聞き手スペース」とを想定する。ふたつのスペースは、コネクタで結合されている⁴⁾。話し手の談話に登場する DR は、すでに話し手スペース内に存在するか、たやすく検索することができるものと仮定する。話し手は何らかの言語表現を用いることで、自分のスペース内の DR の α の対応物を、聞き手スペース内に α' として確立しようとする。

1.3. DR の聞き手スペース内での認知状態は、いくつかのタイプに分類される。本稿では Prince(1981)に従って、次のように分類しておく。例示は Prince による。

(a) Textually evoked : すでに先行談話によって、聞き手スペース内に登録されている場合。DR はゼロ照応・代名詞・定名詞句などの言語手段で指示される(ex. *Susie went to visit her grandmother and the sweet lady was making Peking Duck.*) 以下では単に Evoked と記述する。

(b) Situationally evoked : 発話の状況や、話し手・聞き手との関係で検索できる場合。DR は代名詞・指示詞・定名詞句などで指示される。(ex. *lucky me just stepped in something.*)

(c) Inferrable : 聞き手スペース内にはないが、すでに存在する DR から検索できる場合。DR は定名詞句で指示される。(ex. *I went to the post office and the stupid clerk couldn't find a stamp.*)

(d) New-Unused : 談話では初めて登場するが、話し手と聞き手の共有する知識内にある場合。DR は定名詞句・固有名詞で指示される(ex. *Rotten Rizzo can't have a third term.*)

(e) Brand-new anchored : 談話では初めて登場するが、他の DR との関係が明示されている場合。DR は関係詞を伴う不定名詞句で指示されることが多い(ex. *A rich guy I know bought a Cadillac.*)

(f) Brand-new : まったく新しい DR。不定名詞句や特定の構文で導入しなくてはならない。

(ex. I bought a beautiful dress.)

このような立場に立つ言語観では、代名詞・名詞句につく冠詞・特定の構文の使用などは、談話構築という共同作業において、話し手と聞き手のあいだで、たがいのスペース内のDRをスキャンせよ(あるいは導入せよ)という指示とみなすことができる⁵⁾。

2. 談話における名詞句の分布

2.1. 本稿のコーパスには、主語と動詞を持つ完全な文は1,193あった。名詞主語を持たない文(命令文、非人称構文、voilà NP構文)を除いた有主語文は1,093である。

まず、文の主語位置における名詞句の生起を調べると、次のような結果が得られた。

表 1	代名詞主語	969 (88.7%)
	名詞句主語	26 (2.4%)
	転位主語	98 (8.9%) ⁶⁾

名詞句主語が極めて少ないことに注目されたい。実際の談話で用いられる文の圧倒的大多数は代名詞主語文であり、名詞句主語文は全体のわずか2.4%にすぎない。

この点はすでにFrançois (1974), Jeanjean (1981)などによって指摘されている。Jeanjeanの調査では、ひとつのコーパスでは代名詞主語 92.1%, 名詞主語 2.8%, もうひとつのコーパスではそれぞれ 92.2%と2%である。本稿のコーパスの数字と極めてよく一致しており、平均的数字と見なしてよいだろう。

次は転位主語の多さである。転位dislocationとは、名詞句を節の外に置き、名詞句の占めるべき位置に代名詞を残した次のような構文である⁷⁾。

- (1) a. [398] *toute l'eau de la route elle va rentrer chez vous* (左方転位)
- b. [383] *elle est très jolie cette maison* (右方転位)

Barnes (1985)のコーパスでは、主語名詞句109に対して転位名詞句は310で約3倍弱観察されている。本稿のコーパスでも、主語名詞句26例に対し転位名詞句は98例であるから、転位名詞句が3.76倍ということになり、Barnesのデータとほぼ一致する。

ここから次のような談話構築上の原理が存在するという仮説を導くことができる。

仮説 1

談話ではできるだけ名詞主語を避けよ。主語名詞句はできるだけ転位せよ。

2.3. 次に本コーパスでの主語名詞句の定・不定の別は次のようであった。

表 2	不定名詞句	1
	定名詞句	21
	固有名詞	4

1例のみ見られた不定名詞句は、総称名詞句である。

- (2) [223] *un camion doit rentrer non*

特定の指示対象をさす不定名詞句は1例も見られない。このことはすでに先行研究でも指摘されている⁸⁾。書き言葉では*Un homme est venu hier soir*のように、特定の読みを持つ不定名詞句主語は珍しいものではない。それが極めて僅かしか見られないということは、会話フランス語の大きな特徴である。

次に主語名詞句の聞き手スペースでの認知状態は次のようになっている。

表 3 ⁹⁾ Evoked	1
Inferrable	10
Brand-new	3

Brand-newのうち1例は上にあげた [223] の総称名詞である。これを除外すると、談話に初めて登場した主語名詞句は2例しかない。主語名詞句は、先行文脈の情報から引き出すことができるものが多いのである。

一般に、不定名詞句は新情報を、定名詞句は旧情報を表すことが多い。仮説1の原理と考えあわせると、話し言葉には次のような談話構築上のメタ原理があると考えられる。

仮説 2

主語位置での新規DRの導入は避けよ。

3. 談話内へのDR導入の方略

3.1 さて、では会話フランス語にはなぜ仮説2のような原理が働くのだろうか。それは会話フランス語では、次のような一般的な談話原理が強く働くからだと考えられる¹⁰⁾。

仮説 3

聞き手スペース内に未登録のDRを、談話内に唐突に持ち込むことを避けよ。

では談話内に新規DRを唐突にならないように導入するにはどうすればよいか。新規DRを何か他のものとの関係づけるという手段が有効である。この関係付けを「定位」あるいは「定位操作」repérageと呼ぶことにする¹¹⁾。

定位の手段としては、a. 発話の現場に対して定位する、b. 発話の参加者に対して定位する、c. 既存のDRに対して定位するという手段がある。

- (3) a. [688] oh dites c'est sensationnel hé *ce coin* [現場指示的指示詞 *ce*]
 b. ben heureusement hé euh dites moi [940] quand *mon mari* est mort j'ai eu ri [発話者 *mon*]
 c. [904] je suis en train de ranger une maison dans le rue Carreterie [905] et ben je suis en train de refaire le *l'escalier* ["la maison" フレームの利用]

関係づけとして有効なもう一つの方法は、新規DRを直接目的語として導入することである。Lambrecht (1987), Bentivoglio & Weber (1986)らの先行研究では、話し言葉では新規名詞句は目的語位置で導入されることがいちばん多いことが指摘されている。

- (4) [403] il faudrait bon [404] ici on met *un caniveau*

直接目的語は動詞の項構造 argument structure の関係の網の目の一部に組み込まれており、項構造自体が名詞句にたいして repère の機能を果たしていると考えられる。

3.2. ところが、主語は動詞の項構造の一部を成していない。このため主語の導入には別途の手段が必要であり、もっともよく用いられるものは次のような提示表現である。

- (5) a. [727] si *vous avez* quelqu'un [728] qui pénètre un truc
 b. [926] *moi j'ai* mon fils aîné [927] il gagne un pognon fou
 c. [1055] *j'ai* un ami là [1056] il me disait ...
 d. [1141] *c'est* le maçon derrière là qui m'avait dit [1142] qu'il le fait chez lui

このような提示表現では、多くの場合 *ce, (moi) je, vous* などの指標が *repère* としての役割を果たし、提示機能を持つ動詞 (*avoir, être, etc.*) が新規DRを談話内に導入する。導入動詞には意味の希薄な動詞が用いられ、それらは本来の意味ではなく、談話へのDRの導入という目的に特化されている¹²⁾。

上の例のうち、[926]や[1055]は特に興味深い。その構造は次のように表せる。

Phrase 1

Phrase 2

[*repère*] + [*verbe introducteur*] + [新規DR] ——— [*Pronom*] + [*Verbe*]

└coréférence┘

この構造では、文1は新規DRの談話内への導入という役割だけを果たしている。文1で導入された新規DRは、その時点で話し手スペースに登録されるので、文2の代名詞による照応が可能になる。この構造では、新規DRの導入と、そのDRについての陳述*prédication*は別々の文で行われており、語用論的並置 *parataxe* の関係と云ってよい。

もう一歩進んだ形が [727] の例である。次のような構造をなしている。

Principale

Subordonnée

[*repère*] + [*verbe introducteur*] + [新規DR] — [Pro.Rel.] + [*Verbe*]

文としてより緊密な *hypotaxe* になっている。ただし、主節と従節の意味関係は逆転しており、主節は単なるDRの導入手段で、文の意味の重点はむしろ従節にある。この点が普通の関係節構造との相違点である¹³⁾。

話し言葉では、*parataxe* や *hypotaxe* の構造が好んで用いられる。文の構造の緊密化がより一層進むと、普通の主語・動詞構文になる。ここから次のような文法形成のモデルを考えることができる。

1. *Parataxe* : J'ai un ami. Il m'a téléphoné hier soir.
2. *Hypotaxe* : J'ai un ami qui m'a téléphoné hier soir.
3. *Syntaxe* : Un ami m'a téléphoné hier soir.

段階3の主語名詞句は、段階1や段階2では分離されていた二重の機能を果たしている。

₁ [____ ₂ [un ami]₁ m'a téléphoné hier soir]₂

提示機能を担う ₁[] の一部であると同時に、陳述機能を担う ₂[] の一部としても働いている。会話で多用される *parataxe/hypotaxe* の本質は、このふたつの機能の分離である。

ここから次のような話し言葉の談話原理を考えることができる¹⁴⁾。

仮説 3

談話内へのDRの導入と、DRについての*prédication*とを同時に行なうことを避けよ。

3.3. この原理は主語位置へのDRの導入に限ったものではなく、話し言葉全般に観察される。Giraud (1965), Gadet (1989) は、会話フランス語では関係代名詞は曲用を避けて *que* だけが用いられる傾向があることを指摘している。

- (6) a. une chose *que* tu peux *en* être fier (dontの代用)
- b. la femme *qu'*il *lui* causait (à qui の代用)
- c. ce sont sans doute les Allemands *qu'*ils *l'* ont fait (quiの代用)

関係節マーカーの機能と、先行詞の文法関係の表示とが分離され、前者は一律に*que*で、後者

は代名詞 (en, lui, le などの残留代名詞) で表示されている。Giraudはこれを “le décumul du relatif” と呼んでいる。

会話は書き言葉のように、念入りに構築されるものではない。このために複雑な処理を必要とする機能の重複を避け、逐次的処理ができる形式が好まれるのである。

次のようなメタ原理を立てることができるだろう。

仮説 4

談話においては機能の重合 cumul を避けよ。

4. 転位構文

4.1. 本稿のコーパスでは、転位構文が次の数だけ観察された。

表 4	左方転位	78
	右方転位	51
	計	130

有主語文の総数1,093のうち、約12%が転位構文である。転位名詞句の文法関係による内訳は以下のとおりである。

表 5	左方転位		右方転位	
	主語	60	主語	36
	直接目的語	17	直接目的語	15
	間接目的語	1	間接目的語	0

また転位名詞句の定・不定の別は次のとおりである。

表 6	左方転位		右方転位	
	不定名詞句	5	不定名詞句	7
	定名詞句	57	定名詞句	38
	固有名詞	5	固有名詞	4
	役割名詞句	10	代名詞	2 ¹⁵⁾

ここで役割名詞句というのは、次のようなケースである。

[723] *la seule chose qu'on peut gagner* c'est sur le grillage

役割名詞句の場合は定・不定を云々することに意味がない。ちなみに役割名詞句はすべて左方転位に見られ、右方転位には1例もなかった。

4.2. 一般に転位名詞句は指示的定名詞句と総称名詞句に限られ、特定の読みの不定名詞句は転位できないことが知られている。これは文の主題 *thème / topic* として働くことができるのは、特定の指示対象と総称的概念だからと考えられている。

- (7) a. *Mon frère, il a une belle situation.* (定・特定)
b. *Un succès, ça s'arrose.* (不定・総称)
c. **Un garçon, il est venu hier soir.* (不定・特定)

本研究のコーパスに見られた転位不定名詞句は、次のとおりである。

- (8) a. [46] *parce que des des piliers préfabriqués on en trouve pas de cette grandeur*
b. [123] *un mètre cinquante ça ferait un peu moins cher*
c. [140] *de la terre de Gordes ça vaut vingt-quatre mille francs le mètre cube*

- d. [340] *un artiste menuisier* c'est pas de la menuiserie industrielle
- e. [362] ah non mais *des bricoleurs* j'en veux pas moi

このうち転位名詞句が主語の役割をしている [140] [340] は、問題なく総称と認められる。[123]は実は *le grillage d'un mètre cinquante* の省略なので、これも総称である。[46] [362] は不定名詞句ではあるが、やはりこれも総称とみなすべきであろう。左方転位名詞句の残りは、すべて定名詞句であり、文の主題として働いていることが確認できる。

4.3. 右方転位不定名詞句を持つ文は、以下の7つである。

- (9) a. [104] vous savez [105] combien il m'avait demandé *un maçon*
- b. [363] j'en ai gonflé *des bricoleurs*
- c. [473] j'en ai *du papier*
- d. [601] ça flatterait euh la propriété *une clôture*
- e. [705] moi j'en ai un à Paris hé de *de fils*
- f. [774] j'en ai *des maisons* hein en location
- g. [1020] mais j'en ai *du papier* moi

この例は非常に興味深い。まず主語が転位された[601]は、明らかに総称で問題ない。残る[363] [473] [705] [774] [1020]は転位名詞句が直接目的語である。左方転位の右方転位とは、談話上同じ機能を果たしているのであろうか。

一般に、左方転位と右方転位とを平行的に考えることはできない。左方転位と右方転位には、Milner (1978)が指摘するように、次のような違いがあるからである。

- (10) a. *Des chemises*, j'en ai une.
- b. *J'en ai une, *des chemises*.
- c. J'en ai une, *de chemise*.
- (11) a. J'en ai un, *de cheval*.
- b. *J'en ai un, *de chevaux*.

左方転位では転位名詞句と主文内の数量表示の間に数の一致がなくてもよいが、右方転位では数が一致しなくてはならない。

- (12) a. *Cette classe*, je vais les mater.
- b. *Ton chirurgien*, je la connais.
- (13) a. *Je vais les mater, *cette classe*.
- b. *Je la connais, *ton chirurgien*.

また左方転位では、転位名詞句と主文内の同一指示代名詞に性の一致がなくてもよいが、右方転位では一致が義務的である。実際に本稿のコーパスでも、数の一致しない左方転位の例がいくつか見られた。

- (14) a. [366] parce que *ceux derrière qui l'ont fait faire* [367] *il* m'a dit...
- b. [920] oui mais *J.* vous savez qu'*ils* font pas trop attention eux ¹⁶⁾
- c. [947] *toutes les femmes* que à cinquante ans [947] *il lui* arrive des coups pareils

また左方転位では転位名詞句の文法関係の表示は必要ないが右方転位では義務的である。

- (15) a. *Paul*, je lui ai téléphoné hier soir.
- b. ??*A Paul*, je lui ai téléphoné hier soir.

- (16) a. Je lui ai téléphoné hier soir, à Paul.
 b. *Je lui ai téléphoné hier soir, Paul.

また左方転位では、主文内に同一指示代名詞がなくても成立するが、右方転位では代名詞が義務的である。

- (17) a. Dogs, I like Old English and Golden Labs.
 b. *I like Old English and Golden Labs, dogs. (Rodman 1974)

このような点を考慮すると、左方転位名詞句は主文からの独立性が比較的高く、性数の一致や同一指示代名詞などによって、主文と文法的にリンクされていなくてもかまわないが、右方転位名詞句は主文と厳密にリンクされていなくてはならないことがわかる。

4.4. 右方転位構文に生じる代名詞は、後方照応的であると言われている。例えば次の例の代名詞 *il* は、転位名詞句を「後方照応的に」指示するとされている。

- (18) [70] *il est drôlement dur à poser hé le le grillage de deux mètres*

しかし、このような見方は、話し手と聞き手の共同作業による談話構築という観点からするならばおかしい。話し手の立場から見ると、DR=*le grillage de deux mètres* はすでに話し手スペース内に存在し、*il* は話し手スペース内にあるDRをさしている。しかし、このDRは聞き手スペースにはまだ登録されていないかも知れない。そこで話し手は名詞句 *le grillage de deux mètres* によって、「事後に」DRを話し手スペースに導入していると考えられる。

談話は時間軸に沿って非可逆的に進行する。書き言葉ならば、紙の上で前に戻って可逆的処理が可能であるが、話し言葉ではこれは難しい。もし右方転位文で、代名詞が後方照応なら、代名詞の指示は可逆的に決定されることになり、これは左から右への一方通行的処理に反することになる。本稿ではいわゆる「後方照応」が起きているのではなく、話し手の聞き手のDRアセスメントの齟齬が生じているのであり、処理はあくまで左から右への一方通行的に行なわれていると考えたい。そこで次のような原理があると仮定する。

仮説 5

談話においては、左から右方向への(時間軸に沿った)処理を優先せよ。

4.5. このことは、左方転位名詞句と右方転位名詞句の認知状態の差からもわかる。

表 7 ¹⁷⁾ 左方転位		右方転位	
Evoked	34	Evoked	19
Situationally Evoked	3	Situationally Evoked	5
Inferrable	18	Inferrable	7
Brand-new	1	Brand-new	1
計	56	計	32

左方転位では、Evoked/Sit.Evokedの合計が66%、Inferrableが32%、右方転位ではEvoked/Sit.Evokedは75%、Inferrableは21%であり、右方転位の方がEvokedの割合が高い。上里数詞には、役割名詞句は含めていないが、役割名詞句はEvokedの範疇には入れがたいので、もしこれも含めると、左方転位のEvoked/Sit.Evokedの割合はさらに下がる(役割名詞句は左方転位にしか現れないことに注意されたい)。つまり、右方転位名詞句の方が、先行文脈ですでに登場しているか、発話の状況内に存在するDRをさす割合が高いのである¹⁸⁾。

またこのことは同じEvokedでも、先行文脈内での最初の生起と転位名詞句の距離を比較することでも確認できる。

表 8 左方転位 平均 7.03 clauses
右方転位 平均 3.21 clauses¹⁹⁾

右方転位の方が先行文脈でより近くの名詞句を受けることが多い。右方転位名詞句は、先行文脈とのつながりがより強いのである。

従ってここでは (9)c. [473] のような場合、代名詞en は後続の言語化された du papier をさしているのではなく、話し手スペース内のDR (du) papier をさしていると考えたい。右方転位は話し手と聞き手のDRアセスメントのずれへの配慮が引き起こす構文なのである。次の右方転位はずれが顕著な例である。

(19) (=9.a.)[104] vous savez [105] combien il m'avait demandé *un maçon*
un maçon は特定の読みの不定名詞句であり、通常は右方転位できないものである。この文は明らかに発話の方略上のミスである。談話構築の観点からすると、代名詞 il は話し手スペース内のDR (=maçon) をさしており、話し手はそのDRが聞き手スペースにまだ登録されていないことに気づき、唐突に新規DRを提示しようとしてun maçon を節外に付加したのである。

談話ではこれはしばしば起きることである。Du Bois (1980)は英語の談話で、普通の a book → the book という、不定名詞句から定名詞句という指示照応の流れに反して、いきなり定名詞句が、次に不定名詞句が出てくる逆のケースを指摘している。また名詞句よりも代名詞の方が先に登場するケースもある。

- (20) a. Someone came along before *the kid* on the bicycle but I don't remember who it was ...
Then *a kid* came along on a bicycle.
b. one had a uh I don't know what you call *them*, but it's *a paddle*, and a ball .. is attached to the paddle, and you know you bounce it?

このようにDRアセスメントに齟齬が生じた場合、a. のように改めて Then a kid came along のように談話に導入し直すか、b. のようにit's a paddleと名前を提示することで、その齟齬を補修しなくてはならない。ここから次の原理が考えられる。

仮説 6

DRアセスメントの失敗はすぐに補修せよ。

次の例もDRアセスメント補修の例と考えることができる。

- (21) A : [341] qui c'est qui vous a fait la menuiserie?
B : [342] c'est *monsieur L.* de M. là [343] c'est *un menuisier* oh [344] il a des prix corrects
ここでは固有名詞が先に出て、次に不定名詞が出ている。

5. おわりに

本稿では会話フランス語の分析を通じて、DRの導入に関して書き言葉とは異なる原理が働いていることを明らかにした。その根幹は、話し手スペースと聞き手スペースのアセスメントと、時系列に沿った左から右への処理を容易にするための機能の重合の回避である。これが書き言葉とは異なる話し言葉の統語法を生み出す大きな要因になっている。

文法とは一枚岩の固定的なものではなく、重層的で流動的なものである。重層的というのは、話し言葉と書き言葉とでは異なる原理が働いていると考えられるからである。流動的と

いうのは、特に話し言葉においては、発話の場を中心に、話し手と聞き手のリアルタイムの相互関係が働いているからである。このような観点から明らかになる文法の姿は、ふだん我々が見知っている書き言葉を基本とした文法とは相当異なったものになる。それはまた文法はどのように形成されるかという問にも答えるものとなるはずである。

紙幅の関係で未解決のまま残された問題には、次のようなものがある。

(a) 主語名詞句は従節に多く見られた (主節 12例、従節 14例) が、これはなぜか。

(b) Brand-new の主語名詞句が2例見られたが、これはどのように説明すればよいか。

(c) 転位はふつう主節現象 *main clause phenomena* であるとされているが²⁰⁾、本コーパスでは左方転位で 21例 (27%)、右方転位で 18例 (22%) が従節で見られた。これをどのように説明すればよいか。

(d) 役割名詞句はすべて左方転位されているがこれはなぜか。

(e) *C'est ça le problème.* 型の転位は、右方転位にしか見られないがこれはなぜか。

これらの問題はすべて、本稿の立脚する談話モデルの中で解決できるが、紙幅が尽きたので稿を改めて別の機会に論じたい。

[注]

1) 本研究は文部省の科学研究費の助成を受けて行われたものである (基盤研究 C 課題番号 07610492)。

2) *discourse referent* は Karttunen (1981) の用語。Prince (1981) は *discourse entity* と呼んでいる。

3) *C'est un menuisier.* のような属詞名詞句や、*J'ai confiance en lui.*、*en hâte* のように動詞句・副詞句の一部となった名詞句は DR ではない。

4) ここでコネクタというのは、異なる心的スペースの要素を結びつける語用論的関数であると定義されている。詳しくはメンタル・スペース理論を参照されたい。

5) Prince (1981) はこのような談話を TEXT と呼んでいる。 "...let us say that a TEXT is a set of instructions from a speaker to a hearer on how to construct a particular DISCOURSE-MODEL. The model will contain DISCOURSE ENTITIES, ATTRIBUTES, and LINKS between entities. (p.235)

6) 転位名詞句は代名詞主語をもっている。これを数字に含めるならば、代名詞主語 1,063 (97.6%)、名詞句主語 26 (2.4%) となる。

7) 転位構文は、遊離構文 *construction à sujet détaché* と呼ばれることもある。

8) Jeanjean のコーパスでは、*un N* は 4例、*certain N* は 1例のみであったことが報告されている。

9) ここでは固有名詞は除いている。

10) この仮説は Grice (1967) の「協調の原理」の一部をなすと考えることができる。

11) *repérage* は Culioli の用語であるが、本稿ではこの用語の本義に基づきながらもかなり自由に用いている。

12) このため例えば [926] では導入部の *moi j'ai mon fils aîné* だけでは意味をなさないことに注意しよう。

13) *J'ai Marie qui m'attend dehors.* ような疑似関係節では、関係代名詞は主格の *qui* に限られていることが知られているが、その理由はここでの議論から容易に推測できる。

14) Lambrecht (1987) はこのことを次のように表現している。 "Do not introduce a referent and talk about it at the same time." (p.254)

- 15) 右方転位で見られる代名詞には *le vôtre* のような所有代名詞と, *celui de..* の指示代名詞がそれぞれ1例あった。
- 16) 文中の J. は固有名詞の省略である。
- 17) 表11では役割名詞句のように, 認知状態を問題にすること自体に意味がないものや, 認知状態を判断しがたい例は除外しているのので, 転位構文全体の数とは一致しない。
- 18) このことは, 左方転位 (=topic) よりも, 右方転位 (=anti-topic) の方が topic continuity が高いとした Lambrecht (1987) の指摘とも一致する。
- 19) 主語名詞句は 3.54 clauses であった。名詞主語文と右方転位文は似通っており, 左方転位文だけがちがうことがわかる。
- 20) この点については Green (1976) 参照。

[参考文献]

- Barnes, B. (1985) : *The Pragmatics of Left Detachment in Spoken Standard French*, Amsterdam, J.Benjamins.
- Bentivoglio, P. , E. G. Weber (1986) : "A functional approach to subject word order in spoken Spanish", O. Jaeggli and C. Silva-Corvalán (ed.) *Studies in Romance Linguistics*, Rortrecht, Foris. pp.23-40.
- Du Bois, J. W. (1980) : "Beyond definiteness : the trace of identity in discourse", W. L. Chafe (ed.) *The Pear Stories : Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, Norwood, Ablex. pp.203-274.
- François, D. (1974) : *Français parlé*, Paris, SELAF.
- Gadet, F. (1989) : *Le français ordinaire*, Paris, Armand Colin.
- Giraud, P. (1965) : *Le français populaire*, Paris, PUF.
- Green, G.M. (1976) : "Main clause phenomena in subordinate clause", *Language* 52, pp.382-97.
- Grice, H. P. (1967) : "Logic and conversation", P. Cole and J. Morgan (ed.) *Syntax and Semantics* 3, New York, Academic Press. pp.41-58.
- Jeanjean, C. (1981) : "L'organisation des formes sujets en français de conversation. Etude quantitative et grammaticale de deux corpus", *Recherches sur le français parlé* 3, pp.99-134.
- Karttunen, L. (1971) : "Discourse referent", J. McCawley (ed.) *Syntax and Semantics* 7, New York, Academic Press. pp.363-386.
- Lambrecht, K. (1987) : "On the status of SVO sentences in French discourse", R. Tomlin (ed.) *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, J.Benjamins. pp.217-261.
- Milner, J.-C. (1978) : *De la syntaxe à l'interprétation*, Paris, Seuil.
- Prince, E. F. (1981) : "Toward a taxonomy of given-new information", P. Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, New York, Academic Press. pp.223-255.
- Rodman, R. (1974) : "On left dislocation", *Papers in Linguistics* 7, pp.437-466.